

報告

台湾史教育におけるフィールドワークの活用

——地域に接近して、台湾史を再考する——

陳 文松

はじめに

第1節 台湾史研究とフィールドワーク

第2節 フィールドワークとの出会い

第3節 歴史学の研究と教育におけるフィールドワークの有効性

第4節 古都台南とフィールドワーク

第5節 「悪地」(bad land)におけるフィールドワーク

おわりに—フィールドワークとは何か？

(要約)

本稿では、国立成功大学歴史学科で台湾史を教える筆者の実際の経験を交えながら、台湾における台湾史教育においてフィールドワークという方法を活用する意味を考える。台湾史研究でフィールドワークの重要性が認識されるに至った経緯、筆者自身のフィールドワークとの出会いを述べた上で、今日、台湾史の研究と教育において、フィールドワークが欠くべからざる重要な要素である理由を論じる。若い世代が中学・高校で一定程度の台湾史を学んで大学の歴史学科に進学するようになった今日の台湾において、フィールドワークは、大学生・大学院生がより深い理解に到達するための有効な方法である。また、それは台湾をはじめ世界中の無数の史資料がデジタル化される現代にこそ必要な方法であり、台湾の地方史研究を活性化し、学術研究と地域を結びつける働きをするものでもある。

はじめに

一橋大学の洪郁如先生をはじめ、皆様からお声掛けをいただき、台湾の大学の歴史教育でフィールドワークをどのように活用しているか、具体的事例やその意味を日本台湾学会のシンポジウムで紹介させていただけることに改めて感謝の意を表したい。

2020年春、新型コロナウイルス感染症（台湾では当初、「武漢肺炎」と呼ばれたが、後にCOVID-19という名称が公的に使用されるようになった）の猛威は世間を騒がせ、人々の日常生活に思わぬ影響を与え、学校で授業を受けるというごく当たり前のことにまで大きな変化をもたらした。台湾の場合、不幸中の幸いと言えるのは、世界中の様々な都市がこの感染症の拡大によってロックダウンにまで追い込まれていく中、いち早く新型コロナウイルス感染症への厳格な対応、例えば外出時のマスク着用の義務化、スマホを使った感染者の把握などのほか、台湾—中国間の渡航中止をはじめ、水際対策を徹底したことで、なんとか学校を閉鎖させず、ある程度授業を継続できたことだ。

不安はもちろんあったものの、大学院で少人数の授業を担当する私にとって、危機の中で歴史的なフィールドワークを行う最小限の仕事ができたのは幸이었다。なぜフィールドワークを授業で活用するのか。日本植民地時期の台湾史を研究する者として、自身の経験を交えながら、教師として大学で台湾史を教え、学生に台湾史を学んでもらう上で、方法としてのフィールドワークがいかに重要かについてお話ししたい。

第1節 台湾史研究とフィールドワーク

フィールドワークは、もともと人類学の研究方法としてよく知られている。歴史学または歴史研究の場合、伝統的に既存の文字資料、主として代々の政権が残した紙媒体の文献を材料として学術的な研究を行うことが一般的である。また、こうした資料を収集するためには、中央や地方の公私にわたる文書、書籍など、古いものを保存する資料館や図書館などを踏査する必要がある。台湾史研究において日本植民地統治期や戦後中華民国統治期に関する研究は1987年の戒嚴令解除後、台湾の民主化運動を待って、ようやく「險学」から「顯学」へと変化した。その過程で「田野調査」、いわゆるフィールドワークが重要視されてきたのである。

現在の中央研究院台湾史研究所の前身である中央研究院台湾史田野研究室が1988年に設立された。そこでキーパーソンとなったのが考古学者で中央研究院院士の張光直氏であり、彼の手によって考古学、人類学、地理学、社会学や歴史学といった多分野の研究者が集められ、戦後最大級の台湾研究プロジェクトが推進された。これにより、フィールドワークあるいは「田野調査」が台湾史研究の方法として確立されたといえるだろう。

第2節 フィールドワークとの出会い

私は、1994年夏から1996年春まで、中央研究院台湾史研究所の設立準備機関であった中央研究院台湾史研究所籌備處（台湾史田野研究室の後身で、1993年夏から2004年まで存続した）で編集助手として働いていた。機関誌である『台湾史研究』の校正・編集作業を手伝ってはいたものの、単に仕事としての関わりであり、自分自身の研究はしていなかった。したがって、当時はフィールドワークとは何かわかっておらず、まったく門外漢であった。

1998年春から日本へ留学して、東京大学総合文化研究科地域文化研究専攻で若林正丈先生のご指導を受けて日本植民地期台湾の歴史を研究し始めた際、修士論文の執筆のために、主に国立公文書館や国会図書館を利用した。台湾総督府の教化政策を中心に、伝統的な文献史料調査を行い、可能な限り多くの紙媒体の史資料を読み尽くし、論文を書き上げて博士課程へ進んだ。当時、同専攻で人類学、歴史学を研究する院生、特に日本人院生は、研究分野を問わず、博士課程3年目から必ず1年以上かけて研究する地域へ留学し、現地において長時間の海外フィールドワークを行うことが普通に行われていた。

周囲の勉強ぶりを見てようやく目が覚めた私は、夏休みと冬休みなどを利用して台湾中部にある草屯という小さな町で、日本統治時代に自発的に組織され、反植民地運動の先頭に立った青年団体、炎峯青年会の活動実態や関係者の子孫をめぐるフィールドワークを行うことにした。それは博士論文を書き終わるまで、数年間にわたって継続した。

具体的には、当時活動家が住んでいた場所を訪ね、関係者にインタビューし、関係資料を蒐集した。このように地味な「田野調査」の作業を通じて地元の人々と触れ合い、現地の自然環境や村落の変化などを五感で身に染みるように感じ取れるようになった。その後、再び文献史料を目

にすると、以前は読み取れなかったこと、空間と時間とのズレによって感じ取れなかったところまで、一歩進んで体得できるようになった。さらに、歴史の流れと青年会の顔ぶれや人間関係、また地理的条件や集落の形成など、地域の歴史について、垂直的な理解だけではなく、水平的な理解も組み合わせて立体的な歴史像を再建できたらどんなに素晴らしいだろうと実感したのである。これは、フィールドワークを行わなかったら、絶対に味わうことのできない感覚であっただろう。

第3節 歴史学の研究と教育におけるフィールドワークの有効性

前節で述べた自分自身の経験に基づき、台湾で台湾の歴史を認識するためにフィールドワークがいかに重要か、今の若い世代にもっと伝えていきたいと思っている。

それはなぜか。第一に、1990年代以降、李登輝総統が中学生向けの歴史教科書を新たに『認識台湾』と名付け、今まで中国史の一部としてしか教えられてこなかった台湾の歴史を一冊にまとめて教えるようになった。現在まですでに20年以上、台湾の若い世代を対象に、中学から高校にかけて、台湾史をある程度習得させてきたのである。大学で教鞭を執るようになって、筆者は、歴史学科に入ってきた学生が中学・高校で学んだ台湾史の中身をいかに進化（深化）させるべきかを考えるようになった。より詳しい内容や歴史研究の方法論を習得する以外に、教室を出て台湾の歴史を体得できる現場を見学し、未来の歴史研究者の卵である大学院生の教育にフィールドワークを活用し、その重要性を知ってもらうことが有効だと考えた。

第二点目は、大学の歴史学科のカリキュラムが主に世界史、中国史（2019年版高等学校歴史教科書編纂ガイドラインにより現在は「東アジア史」に変更）、台湾史の三つの分野に分けて、基礎から専門に進む形で構成されていることに関わる。世界史や中国史とは違って、台湾史の内容は、それ自体が台湾の至る所で、まさに目に見える形で、その歴史がいかに発展したのかを我々に伝えるものである。だからこそ、教科書の浅い知識を超えて、台湾史を深化、立証、補足していくには、フィールドワークを活用すべきだと思う。したがって、教師としては、単に研究成果に基づいて教えるだけではなく、どのように「就地取材（その場で史料を入手すること）」で歴史発展に関わるモノや場所を見させて歴史の「臨場感」を体得させるのかが、台湾史の内容を深化させる際により効果的なのではないかと感じている。フィールドワークによって学生達は教科書から習得した歴史について、歴史事件が起きた背景、例えば歴史人物が生まれた場所、その環境、周りの空間、そして村落の形態、さらには周辺との繋がり、人間性など、教科書や専門的な論文が抑えきれないところまで体験でき、歴史の新味を味わうことができる。運が良ければローカルに潜んでいる古文書や文物など新しい一次資料を見つけることもありうるだろう。

第三に、フィールドワークのもう一つメリットを説明する。台湾では30年ほど前から、歴史資料のデジタル化が始まり、今では、オランダ時代から戦後1990年までの文字資料のほとんどが満遍なく科学技術の進化によってデータベース化されつつある。このため、大学生は基本的な歴史知識を知るために、インターネットでキーワードさえ入力すれば、すぐにも資料が閲覧可能

になる。大学院生は論文やレポートを執筆するために、わざわざ図書館や資料館に足を運び、保存されている膨大な資料を探さなくても、いつでもどこでもインターネットに接続してデータベースを検索し、色々な時代、しかも台湾をはじめとして世界中が保存する一次資料（デジタルデータ）を見ることができる。そのため、まさに古いことわざ「秀才不出門 能知天下事（学者は外出せずとも世界を知ることができる）」のように、教室や研究室から出なくても論文を書けるのである。しかし、だからこそ逆に、実際の生活や現場の状況を全く知らないまま、台湾史を理解するというのでは、もう十分ではないといえる。

同じく 1990 年代頃から地方学の流行によって地方史を研究するブームが起こった。もちろん、地方史は単に地方を研究するだけではなく、地方またローカルの特色を発掘し、ナショナル・ヒストリーを補完する役割も担っている。これは、いわば胡適が中国近代思想運動の中で新しい歴史を研究する方法として提唱した「小題大作」である。小さなテーマから着手して、大きな論説を作りあげるように、どんなに小さな地方においても、大きな発見が可能である。まして、戒厳令が敷かれていた時期には、台湾の各地に対する研究もまた中華文化を体現できる課題、対象に偏っていた。

したがって、地方から発信する台湾史の重要性は今後ますます高まると思う。1987 年に戒厳令が解除されてから、地名付きの「何々学」が盛んになりつつある。例えば、宜蘭学、花蓮学、南投学、彰化学、桃園学、屏東学、台南学などである。要するに、「台湾史」全体が「顕学」になったのではない。台湾にある各地方の「地方史」までもが「顕学」になったのである。それによって、大学の台湾史教育はもはや台湾全体の歴史を教えるだけでは、学生のニーズを満たせない。すでに学生は、教科書または先生が一方向的に研究成果に基づき知識を教えることでは満足できなくなるか、興味を失いつつある。いかにして地方の歴史を深化させ、地方の視点から台湾全体の歴史に絡めて理解していくことができるのかが、さらに重要になってくる。つまり、「田野調査」、フィールドワークを再活用することは、もはや大学での台湾史教育にとって不可欠だと考えられる。

第 4 節 古都台南とフィールドワーク

台南は歴史を学ぶ者にとって最適なフィールドの一つだといえる。台南はご存知のように台湾の古都であり、漢民族の移民が台湾へ渡る前に、すでにシラヤ族（平埔族の一つ）がここに住んでいた。17 世紀からオランダ統治、鄭成功王朝支配、また清朝が 200 年以上台湾全土を支配下に置き、19 世紀末からの日本植民地統治、20 世紀半ばからの国民党政権による統治を経て、数々の歴史的な遺産が存在する。2000 年以降、台南市と台南県が併合され、より大きな地理的広がりをもつ台南市が出来上がった。文化だけではなく、農業やテクノロジーなどの各方面でも多元性をもつ大都市に変身したのである。そして、20 年前から台南科学工業団地の開発をきっかけに、5000 年前から 300 年前までの人類活動の遺骨や遺品などの発掘が始まり、発掘の成果はその後国立史前博物館南科考古館に保存された。

300年前というと、まさに「文字がある」台湾史の歴史時期と重なっている。したがって、「台湾人400年史」といった既存の歴史認識や歴史が発展する実態をどのように解釈、補填するのは、我々歴史研究者にとってかなり刺激的かつ挑戦的な課題である。考古学はもう単に文字がない先史時代に目に向けるだけでなく、文字がある時代にも興味津々である。これはいわゆる歴史考古学である。それに対して、歴史研究者（または大学の歴史教師）は我々を取り囲んでいる「現在」、既存のモノからどのように「過去」を発見し、どのように「現在にある過去」と向き合うのか、まさに歴史考現学へのアプローチを持つべきだろう。

つまり、単に古い文献を利用して研究を進めるのではなく、現在我々の目に見える環境の中に、どのような「ストーリー」が潜んであるか、あるいは消えていくのか、これを感知するためにはフィールドワークを活用して歴史を再発見していくことが重要であろう。私が勤めている成功大学はちょうどこのような豊かな環境の中にあって、台湾の歴史を理解するためにフィールドワークをさらに活用しようとする際に最適の場所だと思う。

第5節 「悪地」(bad land)におけるフィールドワーク

現在のところ、コロナが2020年春に世界中で感染爆発を起こして以来、国際的に人と人との交流がシャットダウンされている。だから逆に、台湾では、今こそ受講生を教室やオンラインから連れ出して歴史の現場へ、台湾の歴史を現場で調査し、文献資料も考慮に入れながら、地域のフィールドワークを通じてできる限り長時間そのフィールドに滞在し、正確な調査報告を作成し、その成果を地元の住民と共有し、還元することが大切である。大学で学んだ理論と方法といった知識とフィールドで吸い上げた知識を互いに連動させるのである。これにより、いわゆる地域社会に対する大学の責任も果たすことができる。

最後に、私は、大学院のいくつかの授業を利用して、大学院生を連れて台南市と高雄市とに隣接するいわゆる「悪地」(bad land)、または「月世界」の地形を持つ地域で行ったフィールドワークの事例を紹介する。

「悪地」地域というのは、主に泥岩、砂岩、頁岩で構成され、台湾の南西部の麓にある台南市の龍崎、左鎮と高雄市の内門、田寮が、もっともよく知られている。台南市内（成功大学）から車で約1時間、その中で最も有名なのは、清朝期の台湾で初めての大規模反乱事件として知られた朱一貴が蜂起した内門と1930年代からすでに「月世界」として知られる田寮である。地域ごとに、二つの授業を合わせ、1年間の時間をかけてフィールドワークを行い、別の授業を使って異なる視点から文献資料を用いて現地のフィールドで得た民家、寺廟、物産、観光、教育、水利建設、飲食文化、そして族群の変遷などについて考察し、最後に受講生は授業成果を一冊の調査報告書にまとめて出版し、PDFファイルの形で歴史学科のHPを通じて公開した。

このように、特定の地域でフィールドワークを行い、大学院の受講生の皆で力を合わせて歴史研究を行うことは滅多にない。もちろん、その研究成果は時間もかかるし（都市部から離れているため）、体力も必要だ。また、報告の質も調査の練習が目的であるため、必ずしも優れている

とは限らないだろう。しかし、従来認識されていなかった地域像がこうした歴史的なフィールドワークを通じて大学院生たちの身近な考察や分析を通して一層鮮明に浮かび上がってきたことは確かである。この「悪地」地域のフィールド調査は2017年の龍崎以来、一昨年の田寮、昨年の内門に続き、今年は左鎮へ入る予定である。その際、地域から多くの協力や支持を得られなければ、うまく進めることはできない。

おわりにーフィールドワークとは何か？

ここまで、自分なりの経験をもとにして述べてきた。歴史を研究する方法は、必ずしもフィールドワークに限らない。ただし、一人の台湾史研究者として、台湾史を理解するためには、もう文書やデータベースに頼るだけでは不十分だと感じている。もちろん、フィールドワークを行う際、特に授業を利用して実施する際には、事前に対象地域の既存資料を読み尽くし、安全な交通ルートをアレンジし、インタビュー対象と交渉や相談を行い、保険などの準備にも万全を期するのは当然のことである。

最後に、私自身にとっては、フィールドワークとは、まるで自分の居場所を探す、そして歴史における時間と空間のつながりを見つけることだ、と言える。

「博士」の学位をとって、やっと台南という都市部にある大学の教員になったが、実は当初は、周りにある地域、ローカルに対してほとんど無理解であった。もちろん、ずっと教室の中にいて、受講生に対して文献やデータベースを使いながら定年まで教え続けるのも良いだろう。だが、フィールドワークを活用し、「白紙」にリセットして、台湾史をもう一度身近なところから再検証、再認識しても良いのではないだろうか。また、その白紙に学生と一緒に成果を書き、地元や社会に還元して新たなページを開くのはとても幸せだと思う。話が長くなりましたが、最後までご清聴いただきありがとうございます。